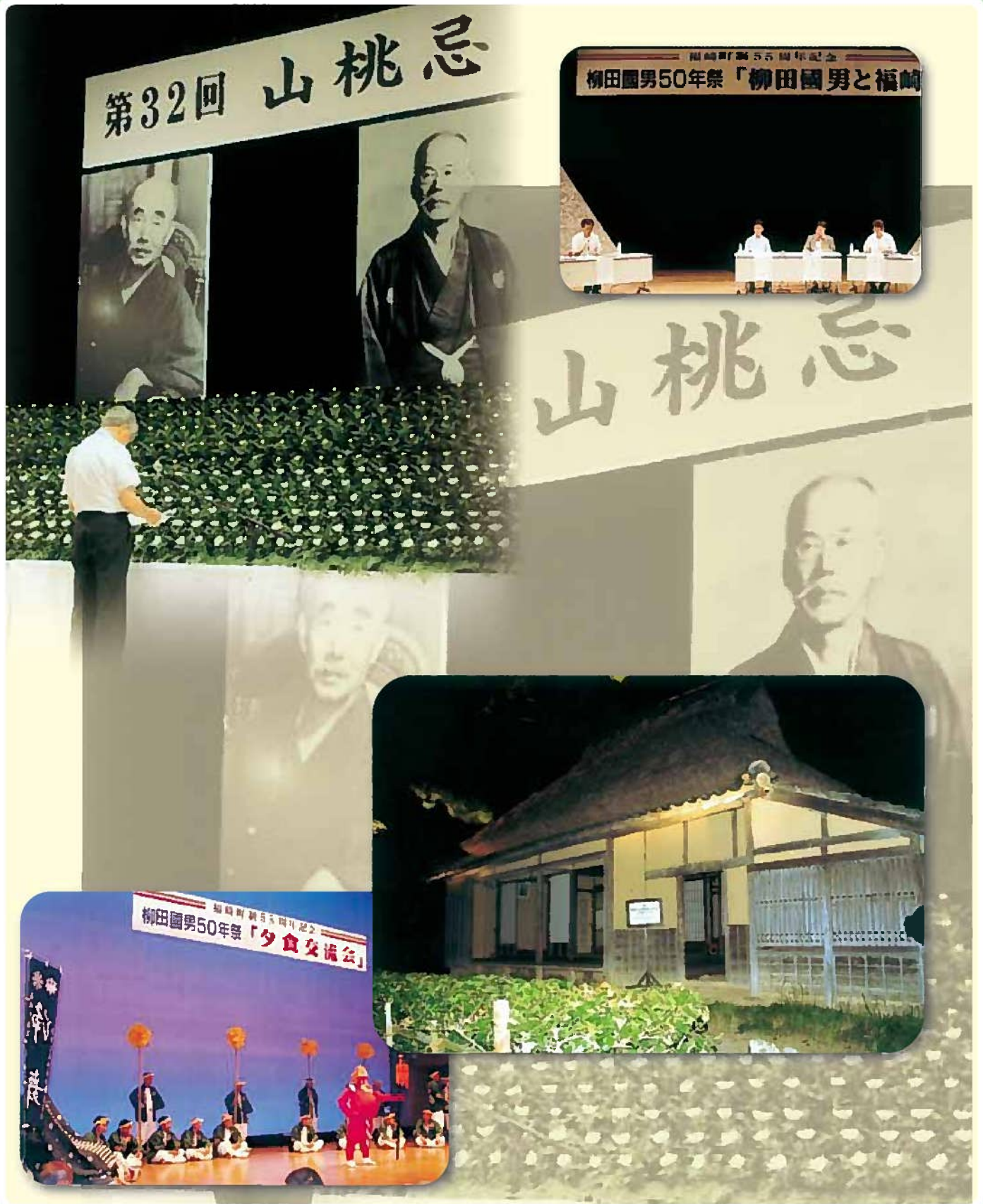


福崎町文化

第28号 平成24年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行



近世の村の暮らし

香寺町史研究室 大槻 守



一 地域史研究と柳田國男

地域の歴史を知ろうと思った時、まず開くのが市町村史、いわゆる自治体史ではなからうか。これは県下のどの市町でも発行されている。もちろん福崎町にも平成七年（一九九五）に完成した立派な『福崎町史』全四巻がある。しかも私の住む香寺町と違つて、大正十四年（一九二五）にも旧福崎町時代の『福崎町史』一巻が刊行されている。

香寺町でも昭和三年（一九二八）に編さんが企てられ、翌年『香寺町史』として脱稿しているのに、理由は明らかでないが印刷に付されることがなかった。

念願の『香寺町史』全四巻がようやく完成したのは昨年秋である。平

成の大合併の余波を受けたためであった。それは今おくとして、『香寺町史』

の特色はとなると、何といつても『村の記憶』と『村の歴史』との二部構成としたことである。先行する『福崎町史』などの単なる後追いに終わらなくなつたからであつた。編さんに着手した当時、県下では市はもちろんほとんどどの町で、市史あるいは町史の編さんを終えていた。

では、なぜそのような構成としたのか。一つは“村”を町史編さんのキーワードとしたことにある。村がいつから始まつたかについては異論もあるが、人々がいつの頃からか、地域を“ムラ”と呼び続けてきたことは紛れもない事実であろう。この「村の歴史」を「地域に生きた人々の生活構築の歴史」ととらえようとする考え方があつた。二つには、この“生活史”をキーワードとしたことである。

このように町史を“ムラ”と“生活史”をキーワードに考えようとしたとき、想起したのが柳田國男の『郷

土生活の研究法』（昭和十年）であつた。

柳田はこの本で、文書史料だけに依拠してきたそれまでの歴史研究を厳しく批判し、旧来の方法では平民（常民）の歴史は明らかにできないと主張している。そして、大正・昭和期に盛行した郡誌・県誌等の編さんに対して、住民の立場から見て「自分たちに属する昔のことなどは一筆も書いてはないじゃないかと」直言する。

郷土研究の第一義は、手短かに言うならば平民の過去を知ることであると書き、「平民の今までに通つて来た路を知ることとは、我々平民から言えば自ら知ることであり、即ち（今まで気づかなかつたことへの）反省である」と述べている。

そのため、あらゆる民俗資料の変化と比較から歴史を探ろうとした柳田が、この著書に先立つて世に問うていたのが『明治大正史 世相編』（昭和六年）である。これは歴史学の常道である「いつ、どこで、誰が」といつた固有名詞をいっさい使わずにいっきと叙述した近代日本の社会史として、名者の名が高い。

その後、柳田がここで予測していた以上に、世相・民俗は劇的に変貌しており、現代は「生活革命の時代」とも呼ばれる（色川大吉『昭和史

世相編』参照）。香寺町史『村の記憶

地域編』はその生活革命を住民自らが記述しようと試みたのだが、果たしてどうだろうか。

ここでは、それに先立つ時代の村と生活を取り上げてみたい。

二 地図・絵図から読み解く

従来の歴史学は確かに文字史料の分析に重点をおいていた。しかし、現在ではそれにとらわれず多様な資料が利用されている。例えば、近世の村を知るためには、基本的な村明細帳や年貢免状をはじめとする各種古文書類だけでなく、建造物や石造物、農具・地名・伝承などと多岐に及んでいる。

だが、近年危惧するのは、旧家の古文書だけでなくこうした各種資料の消滅である。家も道具も様変わりして近世の暮らしをしのばせる物が身の回りから姿を消しているだけでなく、道路も水路も農地も圃場整備ですつかり姿を変えてしまつたからである。村のはずれに立つて見回す周りの景色に深い感慨を催すのは私一人ではないだろう。

江戸時代の人たちの暮らしを考えるときには、まず当時の人たちが目にした景色（原風景）を再現することか

ら始めたい。原風景の中で歴史を追体験するのである。

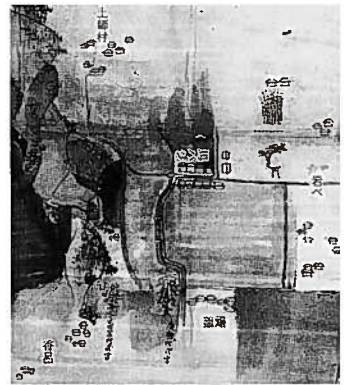
原風景の再現には近世の村絵図と明治の地形図が手がかかる。さしいわい香寺町城には明治三十九年（一九〇六）発行の二万分の一図がある。（福崎町城は二〇年遅れて大正十五年の二万五千分の一図）。開通したばかりの播但鉄道（播但線）が記入されているが、道路や集落にはまだ大きな変化はないことが見てとれる。

市川中流域に当たる福崎盆地は、地形的に大きく山地と台地（河岸段丘）及び低地（沖積平野）に区分される。人々の生活はこの地形条件に制約されており、農業の場合は、特に灌漑方法にそれが現れてくる。山地では谷間の自然流水に依存し、台地は池がかりが主となり、低地は市川から用水路で水を引いている。この灌漑の違いから名づけられた呼び名が上台（上代）・下台（下代）で、上台は池がかり、下台は川がかりの水田を指していることが史料からわかる。香寺町史ではこうした条件に着目して、町域内の集落（近世の村Ⅱ藩政村）を山手の村・台地の村・川手の村に区分してみた。それぞれが山地・台地・低地という地形に対応することになる。川手の村を例にすこし具体的にみ

てみよう。

川手の村は、北は溝口から南は犬飼まで南北に延びている。その中心部に岩部・広瀬の集落がある。岩部（いわべ）は「播磨国風土記」に現れる部（いくはべ）の遺称地とされており、歴史的にも香寺町域の中心である。開発の古い土地であることは、大縮尺図や地籍図で条里地割が明瞭に読み取れることからいえる。ところが、航空写真を掲げると、広瀬付近で幾筋もの旧河道が読み取れるように、市川がたびたび氾濫を繰り返してきた土地でもあった。この洪水との闘いを伝えるのが、岩部に伝わる民俗行事「樽かき」である。洪水を身を挺して防いでくれた大蛇へ捧げる酒樽をかついでいるのだという。一般には大蛇は荒れ狂う河川を表すのだが、ここでは洪水を防いだというのが面白い。

この付近を描いた絵図（天保五年Ⅱ一八三四）が行重にある（行重村絵図参照）。図で直交する道路は条里地割を示している。目を引く中央付近の「馬ハシ」（馬橋）は岩部の枝村で、ここがかぎの手に曲がる生野街道に沿って街村状に発達した集落である。名古屋の商人菱屋平七が城崎へ向かう途中（享和二年Ⅱ一八〇二）、



行重村絵図

馬橋を通過して「人家は一四、五軒、商家はあるが茶屋はない・・・」と書き記している。左上の土師村から右の岩部へと延びる東西方向の道路と生野街道との交差点に当たり、周辺の農村とは違った賑わいを見せていたことがしのばれる。いつのことか、この馬橋で福田辺りの馬子が侍の無礼打ちにあったという。香寺町溝口の西念寺では毎年五月の無縁経会でその馬子の供養が続けてきている。

岩部には横渡し（渡し船）があつて北条（加西市）へ向かう人たちを渡し、市川を上下する高瀬船の船着場からは姫路城下へ年貢米などを積み出していった。岩部が散村状態を示しているのは、元は左方の山地の麓にあつた集落が、治水工事の発達にもなつてしだいに低地の市川西岸に移つていったためだと考えられている。馬橋集落の西側を流す南流する水路が市川の水を引いて、下台を潤

す大妻用水で、集落を外れると生野街道に並走する。南方の広瀬村氏宮（蛇穴神社）付近で、左上から南下しここで大きく曲流する恒屋川と合流しているのが読み取れる。この曲流する水路に囲まれた中州に立地するのが蛇穴神社で、蛇穴の名はその特異な位置から名付けられたと、柳田國男は解き明かした。蛇穴はサラギの当て字で、サラキ・サラケとは土器の一種の名である。蛇がトグロを巻くように、粘土ひもをらせん状に巻き上げて土器を作った時代の記憶があつた頃に命名されたものだというのである（和州地名談）。調べると、サラキ↓サダキと転訛した後に当てられたと思われる「定木」という字名が神社の北に接してあつて、柳田説を立証しているようで興味深い。

三 村のかたち

江戸時代の村は福崎町で三二ヶ村、香寺町で二二ヶ村ある。当時の村名はほぼ現在の大字に受け継がれている。村の規模を香寺町に残る寛延三年（一七五〇）の村明細帳で見ると、人口は平均三二〇余人、播磨では平均に近いが、全国的に見るとやや小規模である。日本の総人口は昭和初年には江戸時代の約二・六倍に増加して

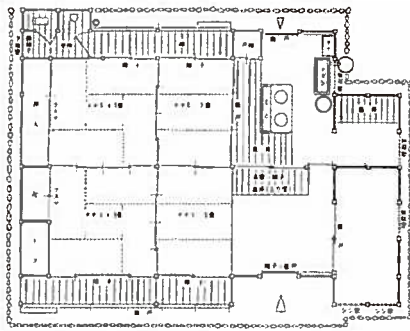
いるのに、中寺村（香寺町域の北半）は一・三倍にとどまっていた、昭和戦前までは、神崎郡の村々は景観から見て、人口から見ても江戸時代とそう大きくは変わっていないかったといえる。

村を構成していたのは本百姓と呼ばれる人たちで、百姓が自立して家族で生活を営むようになったのは中世後期からとみられ、江戸時代に入って確立した。町域内の五人組帳や宗門改帳からわかるのだが、その家族は現代の家族構成に似て平均四・五人、大部分が夫婦と子ども中心の直系家族である。「子宝」を大事にした時代であって、何となく當時を「貧乏人の子沢山」と思いがちだが、それはむしろ近代に入ってからのことであった。

このような家族が寄り添って生活するようになると、切実になったのがわが「家の永続を希う心」であったと柳田國男は説く（『明治大正史 世相編』）。家の平安を切に願うのは現世の幸せのためではなく、「祖先と自分たちのあの世の幸福」を思うからであった、と。祖霊は子孫に供養されることを当然のこととして期待しており、子孫は盆と彼岸には先祖様が還って来ると祭ってきた。今も盆

の行事をみていると、どこかでその想いが続いているように感じる。

こうして自立した百姓（小農民）たちは、独立した家族生活が営め、先祖の祭祀ができるスペースのある家を建てるようになる。それが全国的に農村地帯で見られた田の字型家屋で、土間と四つに区切られた部屋からなっている。近年急速に姿を消してしまっただが、その面影を伝えているのが柳田國男の生家である。柳田は「日本一小さい家だ」といつている（『故郷七十年』）。主観的にはそうだとしても、これほどどこにも見かけたごく普通の民家であった。ただ、柳田のいうように、小家族向けのような小さな家に二夫婦住むことは無理だったといえるだろう。



柳田國男生家 平面図

永続的な「家」は、安定した農業経営の上に成立する。農業の再生産

には山野や用水の確保が不可欠であり、その維持管理のためには共同作業（村役）が欠かせない。さらに早魃や飢饉に立ち向かうためにも、家を超えて連帯する地縁的なつながりがどうしても必要であった。こうして生まれたのが村共同体で、農業生産だけでなく、鎮守の祭祀、村の寄合、村掟の制定などから冠婚葬祭に至るまであらゆる生活面での共同関係を含まれていた。この共同体が「ムラ社会」であり、「世間」とも呼ばれるようになる。

村共同体は村人自身の手で自律的に運営されていた。兵農分離が徹底しており、武士は城下町、ここでは姫路城下に住んでいるので両者が直接接することはほとんどなかった。封建時代は、領主が農民を一方的に搾取するというイメージが強いが、そうではなくて領主と農民との間には一種の契約関係にあったといわれる。

農民は年貢を負担し、領主は農民が困窮した時「御救い」（救恤）を行うというものである。年貢は村としての負担額が示され、個々の農民への割り当ては村の責任で行っていた。これを村請制と呼んでいる。凶作の時は年貢の減免を要求し、時には一揆となることもあったが、当地方では

寛延一揆（一七四八）以外にはその例はない。一方、「御救い」は病身で貧窮者や凶作時の窮民に対して夫食米（飯米）を要望し、給与を受けている。ただ、この「御救い」は家族・一族（一統）で先ず助け合い、村の手も及ばない時であり、言うならば自助・共助を尽くしての公助であった。この江戸時代の仕組みを反映しているのが固寧倉ではなからうか。社倉の一種で宝暦八年（一七五八）、藩の奨励から始まったもので、凶作に備えて食糧を備蓄する制度である。福崎町内にも福田にその建物が現存している。この倉に農民が拠出した米麦を毎年保存し、平常時には困窮者に貸し出していた。一揆が当地方に少なかったのはこの制度が機能したせいではなかったかともいわれる。このように、村は村人自身の手で守られていた、といえる。

この江戸時代から続く村共同体が大きく揺らいだのが一九六〇年代からの高度経済成長である。先祖が必死で守ろうとしてきた「家」と村共同体が消えようとしており、代わって都市化と農業の後継者不足が進行している。この現実をどう考えるか、この激変を後世にどう伝えるかが、今問われている。